

二〇二二年度 第二回

国語 (50分)

〈注意〉

- (一) 開始のチャイムが鳴るまで、この冊子を開いてはいけません。
- (二) 問題は1ページから37ページに印刷されています。
- (三) 受験番号と氏名は解答用紙の定められたところに記入しなさい。
- (四) 解答はすべて解答用紙の定められたところに記入しなさい。

受験番号		

I

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

(1) 烈女・島山勇子

はたけやまゆうこ

1891年(明治24年)、5月20日夕刻。

京都府庁舎の前で、ひとりの若い女性が自決しました。

彼女の名前は、島山勇子。享年27。

かのじよ

きやうねん

彼女は地面に座り、自らの手で両膝を合わせ固く縛り上げ、持ってきた剃刀で腹を切り裂き、喉を突いたのです。

すわ

りょうひざ

あ

しは

あ

かみ

カミソリ

はら

を

きり

さ

のど

を

つ

傍らには、日本政府とロシア政府に宛てた書簡と、母親、叔父、兄弟に宛てた手紙がありました。発見当時まで息はありましたが、医師が駆けつけた①甲斐もなく、ほどなく出血多量で死亡。

かたわ

には、

にほんせいふと

ろしあせいふ

に

あ

てた

しゆん

と、

おとこ

の

あは

は

に

あ

て

た

て

た

し

は

なぜ、島山勇子はこのような行動に出たのでしょうか？

自決の動機は、いわゆる「大津事件」でした。

なぜ、

しまやまゆうこ

は

この

よう

1891年(明治24年)5月11日。来日中だった帝政ロシアの皇太子ニコライ・アレクサンドロビッチ(後のニコライ二世)が、

1891年

(明治24年)

5月11日。

来日中

だ

った

ていせい

ろしあ

の

すうたい

ニコライ

アレク

サンド

ロビッチ

滋賀県大津を通過中に、警護にあたっていた巡査からサーベルで斬りつけられるという暗殺未遂事件が起きたのです。

しが

けん

おほつ

に

あ

た

て

いた

い

た

る

という

あんころ

皇太子の車夫と、同行していた従兄弟のギリシヤ王子ゲオルギオスが応戦し、さらにゲオルギオスの車夫も駆けつけ、巡査は取り押さえられました。

すうたい

の

くるま

と、

どう

して

いた

い

た

る

た

ら

し

巡査の名は、津田三蔵。38歳。津田は取り調べに対し、ロシア皇太子が天皇陛下に挨拶もせず日本国内を訪ね歩いているのは、

すんさ

の

な

は、

つ

だ

さん

ぞう

。38

さい。

つ

だ

は

無礼である。

A

日本

を

せ

め

る

た

め

の

シ

サツ

が

津田がこのように考えたのは、根柢こんきよがなかったわけではありません。当時のロシアはシベリア鉄道建設を計画し、朝鮮半島への勢力拡大を目指していました。同じく朝鮮半島に関心いだいを抱いていた日本にとって、ロシアが脅威きょういであったことは間違まちがいありません。

ですが、実際じっさいに日本とロシアが敵対関係に入るのはまだ先の話。

当時の日本政府はロシア皇太子を国賓こくひんとして迎えており、国を挙げての歓迎ムードに国民全体が沸きかえていました。

しかも、ロシア皇太子は天皇に挨拶あいさつをするために、九州から東京へと向かっている途上とじょうだったのです。

また、日本は1889年（明治22年）に大日本帝国憲法を發布し、近代国家として

B 第一歩を踏み出したばかりでした。

C 大國ロシアを敵に回せるほどの国力はなかったのです。

そんなところへ発生したロシア皇太子暗殺未遂事件。ロシアに、日本を攻撃する絶好の**b** コウジツを与えたようなものですから、日本政府が真つ青になったことは容易に想像がつかます。

しかし、明治天皇が自ら京都を訪れ、ロシア皇太子を見舞い、日本側が誠意を示したことが**②** 功を奏したのでしょうか。幸いなことに、皇太子一行が予定よりも早く離日りじつすることになっただけで、賠償金を請求せいきうされることはなく、もちろん開戦に向かうわけもなく、事態は収束に向かいました。

D、この大津事件の報に接し、東京で女中として働いていた畠山男子は、日本存亡の危機だ、と気が**c** ドウテンしました。

E、皇太子一行が予定を切り上げ帰国すると知り、どうしても一行には日本訪問を継続けいぞくしてもらわなければならない、と考えました。

F、明治天皇がわざわざ京都まで出かけて見舞ったのですから、皇太子がそのまま帰国してしまえば、天皇はもちろん日本国民全体の**③** 面目も丸つぶれだと考えたからです。

G、自分の命と引き換えひかに嘆願たんがんすれば、ロシア皇太子に考えを改めてもらえるはずだと思い、彼女かのじょは直ちに京都に向かいました。

こうして5月20日、この世の名残に京都市内観光をし、日没もない時刻に京都府庁舎へ赴き、その後の彼女の自刃劇は冒頭に記したとおりです。

(2) 武士道の変遷

自決当時の有力新聞の反応は、センセーショナルに扱ったとはいえ、彼女の行動と動機そのものについては冷淡でした。

彼女は当初、雄虎という名の男性だと勘違いされていたようですが、女性だと判明し、いよいよ変人の奇行だということにされてしまいました。

1891年（明治24年）5月23日付の「東京朝日新聞」は、ロシア皇太子の帰国を思い留まらせるために「死を決して」東京から京都へ向かったようだが、それにしても「奇女子」という他はない、と書いています。

同日の「国民新聞」は、勇子の自害を「一命を賭して」日露両国の平和を望んだ「発狂心」にユライすると記しています。

しかし、一部メディアには同情的な声も見られました。キリスト教思想家・巖本善治が編集人をツトめる日本初の本格的な女性雑誌「女学雑誌」は、2号連続の巻頭記事で畠山勇子を取り上げ、自決に至る経緯をドラマティックな語り口で描写しています。勇子は無宗教だったが、一命を投げ出す決心をして「人間天眞の本面目」に還り、「道心」が復活し、日本国民をひたすら思い煩う「女流の改革者」となったと称賛しています。

さらに興味深いことに、外国人たちが勇子の死に心を動かされました。

たとえば小泉八雲、つまりラフカディオ・ハーンは勇子自決の報に接し「勇子——ひとつの追憶」という小文をしたため、さらに2年後には、畠山勇子のお墓参りをしたことを「京都紀行」という短いエッセイで記しています。

八雲は、新聞記者たちをありふれた動機を見つけようとする皮肉屋にすぎないと批判し、その一方で一介の庶民にすぎなかった勇

子を「サムラヒの女」と讃えるのです。

さらに八雲は、男子の墓に実際に詣で「無私なる靈に対して誠実な敬意」を捧げたと記し、「国民の愛と忠誠の証を立てる」という「純潔な理想」を男子の死に見出しています。しかも、男子が上流階級の麗人であったなら、その犠牲の意味はこれほどの切実さをもって迫ってはこなかっただろうと述べ、気高い行いをする人は「平凡な人であって非凡な人ではない」と結んでいます。

このように、④ 男子の自決に関するリアルタイムの反応は、眉をひそめるものと同情的なものとに二分されていました。ところが時が経つにつれ、男子は徐々に偉人として扱われるようになっていきます。

彼女の自決から24年後の1915年（大正4年）、畠山男子は京都市立高等女学校が編纂した書籍『婦人のかがみ』に登場します。その中で、彼女の自決は「やや常軌を逸し」ているが、その国家を思う心は人を動かすもので「世に稀なる烈婦」だと称賛されています。

それからさらに27年後の1942年（昭和17年）刊行の書籍『武士道散華』（萩原新生・著）では、畠山男子は「卑賤」な身分にもかかわらず「切腹武士道」の「日本精神」を実践した女性として紹介されています。武士道を男子だけのものだと思うのは間違いだ、と著者は畠山男子を絶賛しているのです。

1942年（昭和17年）に男子の自決が「武士道・日本精神の精華」だと理解されたのは、当時、武士道が日本人全員にとって模範的な行動ルールとなっていたからでした。しかし、それより半世紀前の1880年代（明治13〜22年）には、武士道は「武士階級特有の倫理観」と理解されていました。つまり、男子のような一介の女中とは無関係なものだったのです。しかも、武士という階級は明治に入って滅んでいたので、武士道も過去の遺物として扱われていました。

それが1890年（明治23年）以降、すべての日本人が武士道を手本にするべきだという機運が徐々に高まり始めました。こうして武士道ブームが社会現象となるのですが、⑤ 男子の自決はその先駆けといつてよいものだったのです。

まだまだ武士道が見直され始めて間もない頃に、一介の女中にすぎない男子が自決を果たした事。これがどれだけ奇怪な事件だ

ったか、おおよそ想像がつくのではないでしょうか。

(3) 明治の日本人と愛国心

このように、時代が進むにつれて、畠山勇子の自決に対する評価は、変人の奇行きこうから、国を思う武士道・日本精神の精華へと変化しました。しかも、今日では畠山勇子の名はほとんど忘れ去られています。

同じ事件でも、時代によって受け取られ方は大きく異なるのです。堅い言い方になりますが、これが「歴史的偶然性」というものです。

つまり、歴史の中ではあらゆるものが変化し、今の私たちにとって自然だと思われている事柄ことばらも、過去にはそうではなかった事例がたくさんあります。だから、何かを永遠不変の真理であるかのように思い込むことには、たいてい罣わながあります。

あなたは現在、日本に生まれた私たちが日本という国を愛すること、つまり愛国心を持つことが自然であり当然のことだと思っ
ていますか？

しかし、ここに「歴史的偶然性」という視点を持ち込むと、どうなるでしょう。現在、愛国心を持つことは自然で当たり前のことですが、過去には必ずしもそうではなかったのではないかと、という疑問が生じてきませんか。そして、^⑥もし仮にそうだとすれば、いつかの未来には国を愛することは自然でも当然でもないことになる、という可能性も出てくることになります。

実際、過去の日本ではどうだったのでしょうか。

明治（1868～1912年）に発行されていたいろいろな雑誌を読むとわかりますが、1890年頃ころまでは、多くの言論人たちが「なぜ日本人には愛国心がないのか」「どのようにすれば日本人は愛国心を持つようになるのか」という問題を論じています。

「だいたい愛国心って何のことだ？」というのが人口の7、8割しを占める一般庶民いっぱんしよみんの受け止め方だ、と思想家・西村茂樹にしむらしげきも189

1年（明治24年）の講演で述べています。

つまり、明治前半の多くの日本人にとって、愛国心を持つことは自然でも当然でもなかったのです。

ところが、です。そのたった7年後の1898年（明治31年）に、フランス出身の宣教師リギョールは、こう述べています。

「世界に国を成すもの沢山あり、然れども日本人程愛国愛国と叫ぶ者は未だ嘗て見たることなし」

——『日本主義と世界主義』 文海堂

つまり、世界にはたくさんさんの国々があるが、日本人ほど愛国、愛国と絶叫する国民は見ることがない、というのです。

わずか7年の間に、外国人が驚くほど多くの日本人が熱狂的愛国者になったのです。

このような極端な変化は、福沢諭吉の言論活動を追ってもわかります。

福沢は初期の著作の中で、日本人が愛国的になることの重要性を力説していました。代表作『学問のすゝめ』（明治5～9年）にしても『文明論之概略』（明治8年）にしても、一面において「すべての日本人に愛国心の重要性を説いた作品だ」と言えます。

「自国の権義を伸ばし、自国の民を富まし、自国の智徳を修め、自国の名誉を輝かさんとして勉強する者」こそが福沢にとっての愛国者でした。

もともと日本人はこうした努力を、自分が属する藩、とりわけ主君のために行ってきました。福沢はこうした態度を、より大きな「日本」という単位に向けてことを目指したのです。

「自国の権義を伸ばし、自国の民を富まし、自国の智徳を修め、自国の名誉を輝かさん」とする努力を国民一人ひとりが怠らないとき、日本が西欧諸国に後れをとらない存在になるのだと説いて、日本人は愛国心を抱くべきだと主張したわけです。

もちろん、福沢が愛国心の必要性を説いたのは、^⑦日本人の多くが愛国的ではないどころか、そもそも愛国的であるとはどういふことかもわからない状態にあったことが背景にあります。

ところが、後に福沢は、日本人の一部が愛国的になりすぎたことに戸惑いを覚えるようになります。1892年（明治25年）に「極

端の愛国者」という論説を発表し、一部の愛国者は外国人に対して強硬な態度をとり、外国人との間で紛争が持ち上がればよく調べもしないで外国人の方が悪いと決めつける、と観察しています。その上で、愛国的であるからといって外国人を敵視する必要はない、と警告しています。

さらに1897年（明治30年）には、福沢は『福翁百余話』の中で「所謂愛国心の迷」について論じ、諸国民が自国の利益ばかりを追求する世界は非情なものであることを嘆き、自国の利益を主張し「愛国に熱する」のは「主義の高尚なるもの」ではない、と断じています。

⑧ 明治初期に日本人が愛国的になることを待望していた福沢は、明治後期には日本人の多くが愛国的すぎることを警戒し、愛国心自体に懐疑のまなざしを向けるようになったのです。

つまり、たった10年前までは、ほとんどの日本人が「愛国って何だ？」と言っていたにもかかわらず、1890年代（明治23～32年）になると、多くの日本人が急激に愛国を叫ぶようになったわけです。ものすごい変化だと思いませんか？

（4）愛国心の教育

なぜ明治初期の日本人が愛国心を持たなかったのかと言えば、そもそも大多数の日本人にとって「日本」という単位が大した意味を持っていなかったからです。

ほとんどの日本人は、明治維新より以前は「藩」よりも大きな単位を意識せずに生活していました。つまり藩が「国」だったので

ある藩に生活している人にとっての「外国」は、よその藩。その向こうの、現在の私たちが言うところの「外国」は、意識の外だったということです。

ですから「日本」なんていう大きな単位を愛するなんて、当時の日本人には想像もつかなかったわけですから。

なので、当時の日本人にあつたとすれば「愛藩心」^{あいはんしん}のようなものだったと言えるでしょう。ただし、藩への忠誠心は、突き詰めれば「主君」への忠誠心だったので、「藩」という共同体に帰属する感覚」とは異なつたものだったと言えます。

ところが、1890年代（明治23～32年）には多くの日本人が急に「愛国」を叫ぶようになりました。

理由はいろいろあります。

ひとつには1890年（明治23年）に教育勅語が公布されたこと。^⑨ 教育勅語の奉読と拝礼は、儀式を通じて愛国的な姿勢を日

本人の身体に教え込みました。

さらに1894～95年（明治27～28年）の日清戦争で、日本が勝利を収めたこと。清国に勝つたことは、世界の中の強国としての「日本」を日本人に強く意識させたでしょう。

その他にもいろいろな要因が絡んで、多くの日本人が急激に愛国的になつたと考えられますが、結局のところ日本人の多くが愛国的になつた理由は、広い意味での「教育」の結果であると言つてよいでしょう。

政府や言論界が「日本人が愛国心を持つこと」の重要性を強調し、そのような教育を施した結果、愛国的な日本人が生まれたのです。

先に述べた教育勅語は、その際に大きな役割を果たしました。

教育勅語を校長先生が読み上げ、生徒がこれをありがたく聞く儀式は、国と天皇に対する畏敬の念を、若い日本人たちに植えつけました。

さらに武士道ブーム以降、武士道という倫理観が日本人全員に要求されるようになりました。一般庶民まで、日本人なら武士を模範とするべしとなりました。

武士は主君（藩主）に仕える存在です。明治日本の「武士」であるべきすべての日本人は、主君＝天皇に仕える存在として読み替

えられました。こうして天皇を中心とする「日本」という国家への忠誠心が、教育によって刷り込まれていったというわけですね。

(5) 〈国民〉は想像の共同体

しかし、よくよく考えてみると「日本人である」という同胞意識や「日本という国を愛する」という感情は不思議なものです。なぜなら、同じ日本人と言っても、親類、友人、知人を除けばほとんどの人々が会ったこともない赤の他人です。そんな赤の他人に、なぜ特別な意識や感情を持つようになったのでしょうか？

ベネディクト・アンダーソンという学者は、この赤の他人との連帯感を「想像の共同体」という言葉で表現しました。つまり、見知らぬ人と「想像」の中で私たちは結びついている、というわけです。

ですが、なぜそのように赤の他人でしかないはずの「日本人」たちと「想像」の中で結びつくことが必要だと考えられたのでしょうか。

それは、日本人を日本という国の〈国民〉にするためでした。

明治維新までの人々は、「藩」に属する存在として自分たちを理解していました。しかし明治になって、「日本」に忠誠心を持ってもらわなければ一丸となって外国に対抗できない。そのためには日本国民であるという意識を一人ひとりに植え付ける教育をしなければいけない。これは、ヨーロッパの国々を真似して明治新政府が行った、国家的プロジェクトでした。

ヨーロッパの国々は、フランス革命（1789～99年…寛政元年～11年）以降、〈国民〉を単位とする国民国家へと急速に変貌しました。

それ以前のもともとのヨーロッパ諸国は、「地方」が江戸時代の「藩」のように力を持っていました。地方の貴族や聖職者が及ぼす支配力は、中央政府の支配力に十分対抗できるだけのものがありました。つまり、中央政府の政策はトップダウン式に地方へ伝え

ることができたのではなく、地方の有力者の協力なしには実現不可能でした。

しかも、各「地方」の文化や社会慣習は、現代とは比較にならないほど独自性が強く、各「地方」で話される言語すら異なっていました。

つまり標準語というものがそもそも存在しなかったのです。

そのように自律性・独自性の強かった「地方」を国家として統合するようになっていくのが、18～19世紀のヨーロッパの歴史です。こうしてブルゴーニュ地方やノルマンディー地方といった、様々な地方の人々がフランス国民として統合されるようになりました。学校教育や社会的プロパガンダを通じて〈国民〉意識が一般の人々に刷り込まれました。

そのために「フランス語」という国語（標準語）が作り上げられました。また、文化や社会慣習を異にする各「地方」をフランス国民というひとつの枠に収めるためには、ひとつの歴史を共有して必要とされました。そこで、様々な国民的英雄の物語としての「国民の歴史」が人々に教え込まれたのです。

これを真似したやり方を、明治新政府もまた日本人たちに対して行ったのです。いろいろな藩の連合体でしかなかった日本という国を、中央の政府が統一的に支配する国に改造するために、ヨーロッパで行われた〈国民〉形成の方法をモデルにしたのです。

まず「国語」が学校教育で教えられるようになりました。^⑩奇妙に聞こえるかもしれませんが、「国語」は明治になってから作られたものです。

また「国史」、つまり日本の歴史が学校で教えられるようになりました。

〈日本人〉という想像の共同体を育むためには、ありとあらゆる手段が用いられました。中でも興味深いのは唱歌の誕生と奨励です。

学校で生徒全員が声を揃えて歌う行為は、歌うすべての人々の間に連帯感を生み出します。日本の景観の美しさや軍隊の勇ましさや歌にし、声を揃えて歌わせることで、〈日本人〉としての意識を次第に植え付けていったのです。このように日本列島に住む人々

に「自分は日本という国の〈国民〉である」という意識を芽生えさせる教育を施し、その結果、〈日本人〉が生まれたというわけです。ですから、日本人なら日本に対して愛国心を持つのは自然で当然だ、というのは事実として間違っています。私たちが〈日本人〉であることを強く意識するようになったのは、明治以降の教育の結果なのです。

そして、過去において愛国心を持つことが自然でも当然でもなかったのですから、未来においても永遠不変なわけがありません。歴史の展開次第では、日本と朝鮮半島と台湾がひとつになって東アジア連合のようなものが出来上がるかもしれませんが、日本から沖縄や北海道が分離して日本という国が縮小することがあるかもしれません。

これはただの思考実験で、もちろん未来は神のみぞ知りますが、現在の日本を永遠不変なものと考えてるのではなく、いろいろな可能性を考えることは「日本という国に暮らす自分」「日本人」である自分への理解をさらに深めることになるでしょう。

【問1】 ㉠㉡のカタカナを漢字に改めなさい(楷書で、ていねいに書くこと)。

- a シサツ b コウジツ c ドウテン d ユライ e ツトめる

【問2】 ①「甲斐もなく」、②「功を奏した」、③「面目も丸つぶれ」とありますが、①「甲斐もない」、②「功を奏する」、

③「面目丸つぶれ」の意味として適当なものを次の中から選び、それぞれ(ア)～(カ)の記号で答えなさい。

- (ア) あまりにひどくて、言葉も出ないさま。
(イ) 一つのことをして、二つの利益を得ること。
(ウ) 名誉や世間体をひどく損なってしまうさま。
(エ) 方策がうまくいって、結果に結びつくこと。
(オ) 何かをしただけの効き目や効果がなかったさま。
(カ) 思わぬ障害により、事の進行が妨げられること。

【問3】 A C に当てはまる語を次の中から選び、(ア)～(オ)の記号で答えなさい。ただし、同じ記号を2度以上

用いてはいけないこととします。

- (ア) あたかも (イ) おそらく (ウ) さながら (エ) そもそも (オ) ようやく

【問4】

D } G

に当てはまる語の組み合わせとして適当なものを次の中から選び、(ア) } (エ) の記号で答えなさい。

- (ア) D 〓さて E 〓つまり F 〓なぜなら G 〓とりわけ
- (イ) D 〓しかし E 〓さらに F 〓ところが G 〓そこで
- (ウ) D 〓さて E 〓さらに F 〓なぜなら G 〓そこで
- (エ) D 〓しかし E 〓つまり F 〓ところが G 〓とりわけ

【問5】

——④「男子の自決に関するリアルタイムの反応は、眉をひそめるものと同情的なものに二分されてきました」とありますが、どういうことですか。次の説明文の a } d に当てはまる言葉を選び、それぞれ (ア) } (ケ) の記号で答えなさい。

島山男子が京都府庁舎の前で自決した時、有力新聞は島山男子という一女性の壮絶な死にざまを報ずるに際して、男子の a } b を疑うとともに、その行為をむしろ c } d なものとして扱ったのでした。

それに対して、巖本善治が関与していた『女学雑誌』や、ギリシャ出身の小泉八雲らは、島山男子という一女性が c } d のために自らの命を投げ出したことを、 e } f にのっとった行いとしてとらえ、男子という女性を称賛し、彼女に敬意を捧げたのです。

- (ア) 国家 (イ) 友愛 (ウ) 女気 (エ) 気楽 (オ) 不快
- (カ) 宗教 (キ) 人道 (ク) 正気 (ケ) 本気

【問6】

⑤ 「男子の自決はその先駆けといつてよいものだったのです」とありますが、どういふことですか。次の説明文の a ～ d に当てはまる語句を選び、それぞれ (ア) ～ (ク) の記号で答えなさい。

「維新」とは、すべてが改まり、新しくなることです。明治維新によって武家社会が崩壊したことで、武士道も、いったんは a となりました。ところが、明治23年頃になると、その武士道や武士道精神といったものが、ふたたび b になるのです。

畠山男子が自決したのは、まだ武士道が見直され始めたばかりの頃であり、彼女の行為は、多くの日本人にとっては理解しがたいものでした。だから、新聞などは、彼女を c として扱ったわけです。ところが、畠山男子の死後、武士道という倫理観・道徳観は日本全体に広がっていきます。それにもなつて、男子の行為に対する評価も変化していったのです。

たとえば、大正時代になると、命を賭して日露の政府に訴えようとした畠山男子は、d として評価されたりします。また、昭和時代になると、男子は武士道を実践した女性として絶賛されたりもするのです。男子の壮絶な最期を、愛国心・武士道という文脈で解釈するようになったのだと言えます。同じものごとでも、時代によって受け取られ方や評価が変わってくるということの、一つの実例だと言えるでしょう。

- (ア) 目ざわりなもの (イ) 一介の年若な女性 (ウ) 奇人変人のたぐい (エ) 夢から覚めること
 (オ) 時代遅れなもの (カ) 手本とすべき女性 (キ) ペテン師のたぐい (ク) 脚光を浴びること

【問7】——⑥「もし仮にそうだとすれば」とありますが、「そうだ」の指し示している内容として最も適当なものを次の中から

選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 愛国心を持つことは自然で当たり前前のことである

(イ) 愛国心を持つことは自然なことでも当たり前前なことでもなかった

(ウ) 自然で当たり前前のことではない、という疑問が生じてきた

(エ) いつかの未来には国を愛することは自然でも当然でもないことになる

【問8】——⑦「日本人の多くが愛国的ではないどころか、そもそも愛国的であるとはどういうことかもわからない状態にあっ

た」とありますが、どういうことですか。最も適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 日本の近代化とは、西欧化であり、西洋のものは全て良いものだと考えられていた。それゆえ、明治前半の日本人の多くは、西欧諸国に強いあこがれを抱き、日本という国を軽んじる傾向を持っていた、ということ。

(イ) 日本精神と武士道とは、深く関わるものであった。ところが、明治維新によって武士という身分が消滅してしまつたことで、明治前半の日本人の多くは、日本を愛する精神を失うことになってしまった、ということ。

(ウ) 江戸時代は鎖国体制下にあつて、日本人には西欧諸国と競い合うという意識がなかった。その延長で、明治前半の日本人の多くは、西欧諸国に負けない日本を作り上げようという目標を持ち得なかった、ということ。

(エ) 江戸期の日本人には、自分が日本という国に属する人間だという意識がなかった。明治前半の日本人の多くも、それと同じような状態で、自分の国として日本を愛するという感覚を持ってはいなかった、ということ。

【問9】

⑧ 「明治初期に日本人が愛国的になることを待望していた福沢は、明治後期には日本人の多くが愛国的すぎることを警戒し、愛国心自体に懐疑のまなざしを向けるようになったのです」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 多くの日本人が熱狂的な愛国者となった時、福沢諭吉は、そこに日本人の行き過ぎた自国びいきと外国人に対する一方的な敵意とを見出し、それを不適切なものと考えるようになったから。

(イ) 十年前には愛国心の意味さえ知らなかった日本人が、急激に愛国、愛国と叫ぶようになった時、福沢諭吉には、それが一過性のブームに過ぎないのではないかと疑わしく感じられたから。

(ウ) 日清戦争に勝利した日本で愛国ブームがわき起こるのを見た時、福沢諭吉は地球上の支配権争いが愛国心を高揚させるのだと気づき、愛国心をきな臭いものだと感じるようになったから。

(エ) 明治後期の日本人が身につけた愛国心とは、国家という大きな単位と結び付くものではないことを見て取った福沢諭吉は、日本には本当の愛国心が育たないのだと見切りをつけたから。

【問10】

⑨「教育勅語の奉読と拝礼は、儀式を通じて愛国的な姿勢を日本人の身体に教え込みました」とありますが、どう
いうことですか。次の説明文の a b c に当てはまる言葉を選び、それぞれ (ア) (イ) (キ) の記号で答えなさい。

教育勅語とは、明治天皇の名のもとに発せられた教育に関する基本理念です。戦前・戦中の学校では、校長が壇上で
教育勅語を奉読する時、全ての生徒は a の姿勢で、頭を下げ、校長が読む天皇の言葉を聴くように求めら
れました。現代でも式典の時などに求められる a の姿勢は、多くの国の b において、基本的な
姿勢の一つとなっています。日本は西欧列強からその姿勢を学び、それを学校という空間にも取り入れました。児童や
生徒たちは教育勅語の奉読という儀式を通して、 a の姿勢を取ることが、地位・階級・年齢などが上の人
間に対して c を示す身体言語となることを学んだのです。

- (ア) 都市 (イ) 親愛の情 (ウ) 体育座り (エ) 一意専心 (オ) 直立不動
(カ) 軍隊 (キ) 尊敬の念

【問11】

——⑩「奇妙きみょうに聞こえるかもしれませんが、『国語』は明治になってから作られたものです」とありますが、どういふことですか。明治期の日本の言語状況げんごじょうきょうについて説明した次の文章を読んで、a d に当てはまる言葉を選び、それぞれ（ア）～（コ）の記号で答えなさい。

江戸時代、日本の中は二百数十の藩はんに分かれ、さらには二六〇余年の間、藩をまたぐ人々の移動を制限してきたために、それぞれの地域ちいきごとに独自に発展したaが成立することになりました。ですから、江戸時代が終わって、明治という新しい時代が始まった時には、例えば東北の人と九州の人とでは言葉がうまく通じない、意思の疎通そつうがうまくいかない、という状況が存在していたのだといえます。

明治政府にとつての重要な課題は、日本全体を一つにまとめ上げ、「自分は日本という国の国民だ」という意識を持った国民から成る国家を作り上げることでした。けれども、そのような国民意識は、自然に芽ばえてくるもの、ほうつにおいて自然にできあがるものではありません。

街中で小学校のクラスメイトを見かけたら、「あつ、同じクラスの〇〇ちゃんだ」といったb意識を持つことができます。でも、顔も名前も知らない他人に対しては、そうはいきません。では、見知らぬ者同士が「自分たちは同じ日本という国の人間だ」という意識を持つために、なくてはならないもの・必要なこととは何でしょうか。——それは、両者がcの言語を持っていることです。

そのためにも、地域ごとにaがあつて、意思の疎通がうまくいかないような状況を何とかしなければなりません。そこで、東京の山の手やまてで使われていた言葉をモデルとして、標準語Ⅱ国語が整備されていくことになるのですが、その国語を日本中の人が読み、話し、理解できるように状況を作り上げていく必要があります。この時、国語の普及ふみかちに大きな役割を果たしたものが、dであり、メディアであったのです。

- (ア) 共通 (イ) 習慣 (ウ) 学校 (エ) 国民 (オ) 武士道
 (カ) 独自 (キ) 方言 (ク) 戦争 (ケ) 仲間 (コ) 愛国心

【問12】 本文の筆者の意見や考えと合致するものを次の中から2つ選び、(ア)～(カ)の記号で答えなさい。

(ア) 島山勇子が自決した直後、ラフカディオ・ハーンや女子教育家の巖本善治は、勇子の行動を「武士道」という文脈で捉え、評価することができた。それは、彼らが「キリスト教」的な思考を有していたからである。

(イ) 江戸時代の日本人にとっては、自分の所属する藩が「国」であり、それ以外の藩が「よその国」であった。だから、江戸時代の日本人は、日本という大きな単位を愛するなどという意識を持ち得なかったのである。

(ウ) 人と人とは、たとえ見知らぬ者同士であつても、同じ人間として同胞意識を抱くことができる。この自然に生まれてくる連帯感を、ベネディクト・アンダーソンは「想像の共同体」という言葉で表現したのである。

(エ) ヨーロッパの国々は、フランス革命以降、急速に「国民」を単位とした国家に変貌することができた。それは、それぞれの国が共通語というものを持ち、その言語を話す民族に共通の歴史を持つていたからである。

(オ) 声をそろえて歌うことで、歌う人々の間に連帯感が生まれる。日本の景観の美しさや軍隊の勇ましさを、生徒全員が声をそろえて歌う「唱歌」は、生徒に「日本人」という意識を植え付ける役割を担ったのである。

(カ) 日本と韓国と台湾が連合国を作ったり、北海道や沖縄が日本から独立したりする、などということが、この「現実世界」で起きるはずはない。そのような事態は、「フィクション」の中になか存在しないのである。

筆を振り回しているようにも見えた。描かれる絵は、いまのところミスはない。少なくとも僕にはそう見えた。すべてが完璧な配置で描かれている。いつの間にか、半切の細長い画面に五輪の牡丹が描かれ、鋭い茎で結ばれて絵は完成していた。

墨一色で描かれているのに、何処からどう見ても牡丹に見える。爆発するような華やかな大輪が、画面のなかでみずみずしく咲いていた。

千瑛は、疲れ果てたように筆を置いて、しばらく絵を見ていた。それから、小筆に持ちかえて、何かを描こうとして、紙の上をクルクルと回ったが、やめて筆を置いた。それで作画は終わった。

千瑛は緊張した面持ちで、湖山先生を見、斉藤さんもふだんにはない険しい目で湖山先生を見たが、当の湖山先生は千瑛の絵を見たまま、なんてこともない白けた目をしている。

⑤ 空気が凍り付くようなこの緊張感は何なのだろうか？

あの好々爺そのものとも思えるような湖山先生が冷たい目をする、こんなにも怖いものなのだろうか。

湖山先生は何も言わないまま首を振った。そのとき、千瑛の顔にはうつむきながら暗い影が広がった。斉藤さんの表情も渋くなった。湖山先生はなおも何も言わない。斉藤さんは心からこわごとと湖山先生に訊ねた。

「先生、いかがでしょうか？ 良い絵だったと思いますが……」

斉藤さんがそう言った後、しばらく湖山先生は答えなかった。その間が、あまりにも怖い。

「斉藤君は、今のが、いい絵だったと思うのかね？」

その声も問い方もあまりにも厳しくて怖かった。千瑛はいつものような跳ね返りを口にすることもなく、斉藤さんでさえ押しつぶされそうだった。湖山先生は、これぞ篠田湖山！ というような誰もが安直に思い描いてしまう大家の、あの表情で話をしている。文句をいうわけでも、不機嫌そうでもないが、何かどうやっても曲げられないような強い意志が、言葉にも雰囲気にも表れている。湖山先生を支えてきた巨大な精神力の前に、僕ですら息苦しくなってしまった。

斉藤さんは何も答えられない。湖山先生は、

「斉藤君、描いてみなさい」

と、言い放った。斉藤さんの動きは固まったが、その後、^⑥意を決したようにうなずいて、別室に道具を取りに行つて戻つてきた。「では……」

と、千瑛といっしょに紙を用意し、千瑛の使っていた道具や筆を退けて自分の道具を並べ始めた。筆洗の水はすぐに千瑛が換えてきた。

ポチャんと、いつもの音がすると、斉藤さんは絵を描き始めた。

千瑛のように揺れはしない。だが、無駄な筆致も少なく、墨の濃度の調整もいつものように狂いがない。調墨だけでいえば、確かに千瑛の数段上を行っている。千瑛の絵もそれを眺めたときはみごとだと思つたけれど、斉藤さんを前にするとやはり未熟さが目立ってしまう。まるで狂いのない筆致に僕は驚いていた。斉藤さんの手は機械のように精密に動いていた。

大筆で画面に叩き付けるように調墨をした筆の全体を使って花びらを描いていき、叩き付けた衝撃で花卉の繊維を描く。その繊維は、当然、筆の毛が画面に乗った際の繊維だが、筆の中に含まれた墨の達人級のグラデーションが、まるでそれを輝きや潤いのある花びらそのものに見せてしまう。

斉藤さんの手順は、徹底して無駄がなく美しい。迷うことなく同じリズムで進み続ける作画は、斉藤さんがそれを身につけるまでに費やした膨大な時間を思わせた。

出来上がった絵は、この前見たときのように完成度が高く、この前と同じようにCGのようだった。

同じ墨を使っているのに、薄墨と濃墨の差が千瑛の絵よりも広がっているために、絵そのものが光を帯びているようにも感じた。明らかに目を引く美しさがあった。そして、何よりも千瑛のものよりもさらに写実的で、形に狂いがなかった。傍目で見ても、絵ではなく写真のように描かれる画面は技術というよりも魔術に近い。何か騙されたような気さえしてしまう。

これならばと思い、湖山先生の顔をのぞいてみるけれど、湖山先生の表情は相変わらず冷めている。斉藤さんが、筆を置いて、湖山先生を見ると、⑦湖山先生は疲れたように目頭を押さえて、それからゆつくり首を振った。

斉藤さんのこれ以上、青くなりようもない顔がさらに青ざめているのを見ると、心から不吉な感じがした。千瑛はその背後で、もうすぐ泣きそうだ。このときだけは、千瑛は弱々しい小さな女の子のように見えた。

湖山先生の静かなため息が聞こえて、一同が言葉を失くしているところに、

A

という、いつもの軽いノリで西濱さんがお茶を運んできた。手際よく、皆にお茶を配ると、斉藤さんと千瑛と僕を席に着かせた。ナイスタイミングだとも言えるし、ちよつと間が悪すぎるともいえる微妙な瞬間に西濱さんはやってきて、何もかもを小休止させてしまった。湖山先生は、西濱さんを見るとやつと微笑んで、

B

と、いつもの好々爺にわずかに戻り、千瑛はお茶を飲みながら熱くなった瞳を冷ましていた。斉藤さんだけが元のまま青く、お茶にも口をつけない。僕は緊張でカラカラになった喉を潤していた。当の西濱さんは、頭からタオルを取って、僕の横に座ってズズズとお茶を啜っていた。この沈黙に響く、なかなかいい音だった。

C

と湖山先生は言ったが、それは明らかにお茶のことだろう。

D

と西濱さんが、声を上げて、湖山先生が、

E

と子供のよう^{たす}に訊ねると、ほとんど機嫌はなおっていた。西濱さんは、

「今日の帰りに、翠山先生のところの茜さんが持たせてくれたんですよ。お裾分けだそうです。翠山先生のところの息子さんがほら……」

「ああ、翠山先生のところのお婿さんかあ。そういえば、お茶屋さんの工場に勤めておられるんだよね」

「そうそう。茜さんのお父さんです。湖山先生について新茶を持ってきてくれていたみたいですよ」

「なるほどね。翠山先生の家にはいつもお世話になるねえ……。西濱君、翠山先生のところにはよくよくお札を言っておいてね。審査でもいつも助けられてるし」

「もちろんですよ、先生。翠山先生にも茜さんにもまたお札を伝えておきます」

「うんうん」

と湖山先生はうなずき、さっきまでの不機嫌さは何だったのだろう、というような不思議な和やかさに包まれて話が進んでいたところで、斉藤さんが声を上げた。声は緊張で震えている。

「せ、先生、わ、私の絵は……」

それは場を締め上げるような苦しい声だった。

湖山先生は、ハッと気づいたように、元の厳しい顔に戻って、斉藤さんと千瑛を見た。二枚の絵はテーブルに隣り合って並べられている。同じ構図で雰囲気がよく似ている。斉藤さんのほうは完成度が高く、千瑛のほうが情熱的だ。二枚とも僕にはすばらしい絵に見える。湖山先生は何が気に入らないのだろう。湖山先生は大きくまばたきして、ため息をついてから、

「西濱君」

と、それだけ言った。西濱さんは茶碗から口を離し、ハツとしたように顔を上げた。きつとさっきの一瞬は、黙って茜さんのことを考えていたのだ。茜さんの話が出たから、茜さんのことを考え続けているなんて、なんでそんなに単純なんだ、と思ったけれど、この柔らかなところに今は救われていた。

「西濱君」

ともう一度、隠やかに湖山先生は言つて、西濱さんは、ああはいはい、と立ち上がった。

斉藤さんと千瑛の絵の前に立つと何を言うことも、思うこともなさそうに、そのまま筆を取った。

「千瑛ちゃん、これ借りていいかな？」

声を掛けると、千瑛は、どうぞとうなずいた。西濱さんは当たり前のように微笑んだ。良いお兄ちゃんという表情だ。描き始める前に、何かに気づいたようにもう一度筆を置いて、墨をすつて、それからいつも着ている作業着の上着を脱いだ。たぶんいつでもタバコを胸ポケットに入れていいるから、上着を着ているのだろう。西濱さんの上着はいつでも汚れていて、ところどころ泥んこだ。だが、それを脱ぐと、隆々とした引き締まった体や長い腕が長袖のTシャツ越しに現れた。工務店のお兄ちゃんが水墨画家に変身した瞬間だった。

「では、あらためて筆をお借りして」

と描き始めようとしたところで、斉藤さんは気づいたように紙を取り換えて、西濱さんの前に置いた。

「斉ちゃん、ありがとう」

と穏やかに言つた後、西濱さんは⑧「一気呵成に描き始めた。

速い。

千瑛も速いが、それよりもさらに速い。そして、速いのに余裕があり落ち着いている。千瑛がヴァイオリンのように筆を小刻みに身体を揺らしながら使うのだとすれば、西濱さんはコントラバスか、チェロのような大らかな動きで身体を使っている。筆の先は、速いが、落ち着いている。そして、画面の部分によって速く運筆する場所とゆったりと運筆している場所の差が大きい。大柄な体軀から生まれる生命力をそのまま筆に込めている印象があつた。描かれている絵は美しい。それは当然のことだった。

だがそれだけではない。千瑛や斉藤さんの絵とは本質的に異なっている。それは美ではない何か、だ。

僕の目は画面に吸い込まれて、それと同時に、僕は自分の心の内側にあるガラス部屋まで意識した。その場所と外の世界が繋が^{つな}り、そこから僕^{ぼく}は西濱^{せいひん}さんの水墨^{すいぼく}を眺^{なが}めていた。

ガラスの壁^{かべ}そのものが、小刻みに震^{ふる}えていた。

西濱^{せいひん}さんの一筆、一筆が真つ白い画面に刻まれるたびに、壁は震え、目は吸^すい込まれた。

これは明らかに、美などではない。

美しさなど思いもしなかった。そうではなく、ただ心が震え、一枚の絵、一輪の花、たった一つの花びらの中に命そのものを見ていた。

西濱^{せいひん}さんの急激^{きゅうげき}に膨^{ふく}らんでいく生命感が、画面の中に叩き付けられていく。筆致^{ひつち}のことなどどうでもいい、ただ、その大きな空気が美以外のえたいの知れない感情を僕の中に呼び起こした。温度があり、揺^ゆさぶられ、そして何かを感じずにはいられなくなる。自分もこんなふうになにかを成すことができれば、という思いを掻^かき立てられてしまう。

僕はガラスの壁^{かべ}に貼^はり付いて、外の世界の西濱^{せいひん}さんの水墨を食い入るように見ていた。

僕は感動していた。僕は感動に手が震えていた。

絵はあまりにも速く出来上がった。出来上がった絵は、千瑛や斉藤さんのものよりも乱れ、写真のようではなかったが、^⑨それは牡丹^{ぼたん}よりも牡丹らしいものに見えた。

何がそう見せているのか。

形も何処^{どこ}か破綻^{はたん}していて、形よりも筆致^{ひつち}のほうが強^おく表れている面と線の応酬^{おうしゅう}にどうして牡丹を感じるのか分からなかったが、その絵には、斉藤さんと千瑛の絵にはない圧倒^{あつたうてき}的な存在感があった。

並べてみて、僕の目にはようやくそれが映った。湖山先生が、何が気に入らないのかもそのときに分かった。

「命だ」

西濱さんの絵には命が描かれていた。

一輪の牡丹と真剣しんけんに向き合い、その牡丹に命懸けいのちがけで向き合っている西濱さんの命が、こちらにまで伝わってきた。手先の技法など無意味に思えてしまうほど、その命の気配が画面の中で濃厚のうじゆうだった。西濱さんのその気配は明らかに西濱さんの技術を超こえている。技術はまるでその生命感せいめいかんに及およばないが、それは問題ではなかった。ただそこに生きて咲さいている花がある。そのことだけはほかの絵よりも確かに伝わってきた。

それに比べれば、斉藤さんと千瑛の絵は、花を追いかけるのに力が入り過ぎていて、確かに美しいが、心惹ひかれる美のさらに向こう側に行けない。千瑛の情熱じやうねつだけがわずかに千瑛の心の在り方や温度を伝えるくらいで、それが西濱さんのような強烈きやうれつな感動を生むわけではない。だが問題は、この二つの表現はどちらかが劣せつっているわけではないということだ。

あまりにも高いレベルの話過ぎて、僕を含かくめた大方の人間にはそれから先の想像も及ばない。ほとんど真上にあるような仰あおぎ見るしかない高みを、その真下にいる人間は判じようがない。星々ほしほしとの距離きょりを僕らが測れないのと同じように、僕らには正確なところは分からない。

湖山先生には、この三枚の絵はどう見えているのだろうか。

湖山先生は相変わらずお茶を飲んでいた。

西濱さんの絵を見て、湖山先生は、

「そうだね」

とうなずいた。西濱さんは照れたように笑っていた。湖山先生は、なおもじっと見た後、

「まあ、なんだかとても生き生きしているけれど、今日は何かいことがあったの？」

と湖山先生が笑うと、西濱さんは図星ずせいのように後頭かを搔かいた。これはもう明らかに茜あかねさんのことだと思ひ至るのに、それほど時間は掛かからなかった。だが、^⑩そこでふいに僕はとんでもないことに気づいた。

そんなささいな心の変化が筆にすぐに表れるほど、繊細な反応を西濱さんの筆は有しているのだ。西濱さんの心が現実と筆を繋いでいる。西濱さんは、その躍るような心の変化を牡丹という形に変えたのだ。牡丹という花の命の在り方を通して、自分の心や命の在り方を造作もなく表現した。

こういう技のことをなんとたとえればいいのか。そもそもこれは技なのだろうか。

湖山先生は口を開いた。

「水墨というのはね、森羅万象を描く絵画だ」

斉藤さんと千瑛は、これ以上ないほど真剣に湖山先生の話聞いていた。湖山先生もまた二人に語り掛けている。

「森羅万象というのは、宇宙のことだ。宇宙とは確かに現象のことだ。現象とは、いまあるこの世界のありのままの現実ということだ。だがね……」

湖山先生はそこでため息をつくように息を放った。

「現象とは、外側にしかないものなのか？ 心の内側に宇宙はないのか？」

斉藤さんの眉が八の字に歪んでいた。千瑛は何を言われたのか分からないほど、言葉に迷っていた。僕にはようやく湖山先生が何を言おうとして、^①なぜ僕がここににいるのか、ほんの少しだけ分かるような気がしてきた。

「自分の心の内側を見ろ」

と、湖山先生は言っていたのだ。それを外の世界へと、外の現象へと、外の宇宙へと繋ぐ術が水墨画なのだ。西濱さんの絵が答えなら、もう、そうとしか考えられなかった。

心の内側を解き放つために、湖山先生は僕をここに呼んだのだ。

【問1】

①「一心不乱」、⑧「二氣呵成」とありますが、それに関する(1)(2)の設問に答えなさい。

(1)——①「一心不乱」の意味として最も適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 相手を恋いしたう気持ちや待ち望む気持ちが非常に強いさま。

(イ) いっさい休むことなく、勢いによって最後までしあげるさま。

(ウ) それぞれの心と体がひとつになるほど強く結びついているさま。

(エ) ほかのことに注意をそらさず、そのことだけに集中しているさま。

(2)——⑧「二氣呵成」と対になる(反対の意味になる)ものを次の中から**2つ**選び、(ア)～(オ)の記号で答えなさい。

(ア) 無我夢中 むがむちゆう

(イ) 試行錯誤 しこうさくご

(ウ) 猪突猛进 ちゆうつもうしん

(エ) 初志貫徹 しよしかんてつ

(オ) 沈黙黙考 ちんしもくこう

【問2】

②「間の抜けた」、③「手持ち無沙汰」、⑥「意を決した」とありますが、それぞれの意味として適当なものを次の中から選び、(ア)～(カ)の記号で答えなさい。

(ア) こうしようという覚悟を決めること。

(イ) いったん決めた選択を変えてしまうこと。

(ウ) 当てがはずれてしまっ**て**ほんやりすること。

(エ) 心中に何かたくらみを隠しも**つ**ていること。

(オ) 何もすることがなくて、時間を持てあ**ま**すこと。

(カ) 他を出し抜いて自分**だ**け先に物事をな**ぬ**そうとすること。

【問3】

④「千瑛は牡丹を描いていた」とありますが、「僕」は「千瑛」の絵をどのように受け止めたのですか。次の説明文の a ～ d に当てはまるものを選び、それぞれ (ア) ～ (シ) の記号で答えなさい。ただし、同じ記号を2度以上用いてはいけません。

水墨画の大家である篠田湖山の孫・千瑛は、水墨画を習い始めたばかりの「僕」にとってこの分野では先輩に当たり
ます。本来であれば a なる筆致を持つ彼女の描き方は、「大輪の花」「大きな葉」とあるような力強さを持つ一
方、墨の色をみごとに変化させ、濃淡を描き分けられるだけの b さを持っていました。今日に限って彼女の
表情は硬く、c ように感じられても、結果的には、d するような花卉の牡丹がみずみずしく画面
に咲いているごとく「僕」には思えたのです。

- | | | | |
|--------|--------|-----------|--------|
| (ア) 卓逸 | (イ) 精密 | (ウ) 無駄がない | (エ) 感動 |
| (オ) 華麗 | (カ) 多様 | (キ) ミスはない | (ク) 爆発 |
| (ケ) 超絶 | (コ) 周到 | (サ) ぎこちない | (シ) 膨張 |

【問4】

⑤「空気が凍り付くようなこの緊張感」とありますが、その説明として最も適当なものを次の中から選び、(ア) ～ (エ) の記号で答えなさい。

(ア) 普段ならば絵の良し悪しをまっさきに尋ねてくるはずの千瑛が、今日に限って湖山先生の出方をうかがっていて、見習い中の「僕」だけでなく、その場にいる誰もが、作画の途中でどのような致命的な失敗があったのか判断できずに動けなくなっている。

(イ) 普段は優しく人あたりもよさそうな湖山先生が、全身の力すべてを込めたような千瑛の描きぶりを見てもまった

く動することなく、かえって興をそがれてしまったように見えるので、その場にいる誰もが湖山先生をどうなだめればいいのか困っている。

(ウ) 普段とは異なる特殊な状況において描き出した千瑛の絵は、そばで見ている「僕」から見ても決して出来がわるくはなさそうなのに、いつまでたっても湖山先生が何も言わないので、いったい何が起ころのかと、その場にいる誰もがすくみ上がっている。

(エ) 普段から容姿や服装がだらしなく、年寄りじみている湖山先生が、こと水墨画のことになると急に真剣な態度を見せ、千瑛の絵の出来栄えをじっと見つめており、いつものことながらその切り替えの速さと鋭さにその場にいる誰もが驚きおののいている。

【問5】——⑦「湖山先生は疲れたように目頭を押さえて、それからゆっくり首を振った」とありますが、どうしてですか。最も

も適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 無駄な筆致がほとんどなく、墨の調節のしかたも完璧に近い斉藤さんの絵は、とても写実的で非の打ちどころもないのだが、墨の色のみで対象を本物そっくりに描くというだけでは、作品としてすぐれていることにならないから。

(イ) 完成度が高く、描かれた対象からまるで光が放たれているような斉藤さんの絵は、見る人を立ち止まらせるほどの美しさに満ちてはいるが、見る人の目に魔術のような錯覚をもたらしてしまう点において、水墨とは呼べないから。

(ウ) 写真のように美しい斉藤さんの絵は、膨大な時間をかけて獲得された彼一流の技術によって支えられているが、水墨にくわしくない鑑賞者にとってはやや難解なところがあり、普遍性のある作品になっているとは言いがたいから。

(エ) まるで下絵があるかのように同じリズムで描かれていく斉藤さんの絵は、コンピューターグラフィックス(CG)を見慣れた現代の人にとってはなじみのあるものだろうが、伝統的な水墨の世界からは逸脱してしまっているから。

【問6】

A

E

に当てはまる会話文として適当なものを次の中から選び、(ア)～(オ)の記号で答えなさい。

(ア) 「悪くない」

(イ) 「これは何処のお茶？」

(ウ) 「西濱君、ありがとう」

(エ) 「美味しいですよね」

(オ) 「お待たせしました〜！」

【問7】

⑨ 「それは牡丹よりも牡丹らしいものに見えた」とありますが、これに関する次の説明文の(1)～(4)について適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

筆が進むにつれ、だんだん「僕」は西濱さんの世界に引き込まれていきます。

確かに西濱さんの絵は(1)

(ア) お世辞にも上手とは言えないほど構図がよじれて

(イ) 形式的なほころびが目立ち筆致の方が強く表れて

(ウ) 相手をねじふせようとする圧倒的な力にあふれて

いるように見えます。

一方で「僕」の目には、西濱さんの絵が、千瑛や斉藤さんの絵とは本質的に異なった点があると映りました。もちろん、千瑛や斉藤さんの描いた牡丹も、素晴らしい出来上がりです。

それでも二人の絵は(2)

(エ) 手先の技法の完成にとられすぎて

(オ) 上手く描こうと画面を意識しすぎている

(カ) 対象をとらえるのに力が入りすぎている

と「僕」は思わざるをえません。

「僕」が惹かれているのは、西濱さんの手によって一枚の絵が出来上がっていく過程の躍動感やくどうかんにあり、

少しずつ (3)

(キ) 刻み込まれていく芸術家の祈りいののような熱のほとばしり

(ク) 肉づけられて華やかに浮かび上がる可変的な造形の数々かずかず

(ケ) 白い画面に吹き込まれていく生命の息吹に似た一瞬一瞬

に、同じ場にたたずむ者として

共鳴していくのです。大きな体から生まれる力をそのまま筆に込めるような西濱さんの描き方は、

(コ) 水墨すいぼくという名の音楽に包まれているような陶酔とうすい的な感覚

(4) (サ) 魂たましいを手に入れた花が飛び出してくるような神秘的な感覚

(シ) 美が美であることを越えていくかのような不思議な感覚

を「僕」にもたらしめたのでした。

【問8】

——10 「そこでふいに僕はとんでもないことに気づいた」とありますが、どういうことですか。最も適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 描く直前において内側に抱え込んだ感情の綾さえ、西濱さんの絵にはにじみ出ている。描き手の感情表現として絵を描くというのは、画面の上に自分自身を、周囲の世界から切り離されたものとして表現することにつながっている。芸術家として世界と正対するというのはまさに、西濱さんのような人のことを指すのではないか、ということ。

(イ) 牡丹という花の命をとらえ、紙の上で再現するためには、徹底的な観察とそれを墨一色で描き切る力が必要になる。西濱さんは、牡丹の花としての本質を紙の上に投影し、あと戻りのさかないひと筆書きのようになぞっている。ならば描く前にすでに、自身の想像のうちで、命を吹き込まれた牡丹が完成していたのではないか、ということ。

(ウ) 心というあやふやなものを自身で操り、西濱さんはまるで踊るように筆を動かしている。それは、絵を描くという姿勢を究極的に突き詰めた結果、つねに同じ水準で描ける域までたどり着いているということを意味する。他人の筆と他人の硯であつても、自分自身の絵にしてしまうところに、西濱さんの凄味があるのではないか、ということ。

(エ) たった今、この瞬間における自分のありようを筆先に乗せて、西濱さんの描く絵は出来上がっている。つまり、生きていくことと絵を描くことが同じ次元で溶け合い、作品に影響を与えているのである。それを何気なくやってみせてしまうところに、西濱さんのたくいまれな芸術家としての才覚があふれ出ているのではないか、ということ。

【問9】は次のページにあります。

【問9】

——⑩「なぜ僕がここにいるのか、ほんの少しだけ分かるような気がしてきた」とありますが、これに関する次の説明文の(1)～(4)について適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

「僕」は、西濱さんの作品の制作過程を通じて、世界のありのままを描くというの、目で見えているものだけを描くのではないのだと考えるようになりました。

つまり水墨とは、対象をただ画面に写し取るのではなく、

(1) (ア) 人生で出会ってきた多くの人に対する感謝の気持ち
(イ) 積み重なった技術の結晶を存分に使った究極の形態
(ウ) 自分の中でうごめいている心や気分も含めたすべて
を描くことにより、

(2) (エ) 見えない美しさが現実世界の底に隠れている
(オ) 過去と現在とが渾然一体になって立ち上がる
(カ) 世界と自分がひとつながりのものとしてある
ことに気づかせてくれるもののだと言えます。

つまり、絵の世界と現実の世界とがはっきりと分けられたものとしてあるという前提に立つことなく、

(3) (キ) 鋭く細やかな感受性によってとらえられた世界を、自分もろとも描き切る
(ク) 揺さぶられ、たゆたう水面のように、時の流れ自体に身をゆだねてしまう
(ケ) 感動しているという実感にもとづき、改めて対象の美しさを発見していく
ことこそ、水墨を描く

ということなのです。そうであるならば、描く主体についてもとらえ直す必要が出てくるでしょう。

「僕」は、湖山先生に誘われて何となく水墨を習いはじめた大学生に過ぎませんでした。しかし、ここに至って、自分が絵を描くということに積極的な意味を見出そうとしています。西濱さんの描きぶりをふまえて言えば、絵というの

は、描き手が対象をとらえ、それを支配的に描き出すことを意味しません。自分が置かれている状況を受け入れ、それがあるがままに肯定し、筆のおもむくままに見えて実は、自らが動かされていることにこそ、水墨の本質が隠されているのです。ゆえに、

(4)

- | | |
|-----|---------|
| (コ) | 線を、僕は描く |
| (サ) | 線が、僕を描く |
| (シ) | 線で、僕が描く |

のだということができるとしよう。

【出典】

I 将基面貴巳『日本国民のための愛国の教科書』（百万年書房、二〇一九年）六～二八ページ（ただし、省略した箇所がある）

II 砥上裕将『線は、僕を描く』（講談社、二〇一九年）一六五～一七六ページ

